

乳児のスキンケアに関する文献検討

高橋育子*, 佐藤幸子**, 今田志保**, 本間恵美*

*山形大学医学部医学系研究科看護学専攻

**山形大学医学部看護学科

(令和元年12月16日受理)

抄 録

【背景】 母親の育児不安の一因として乳児の皮膚トラブルがあげられている。乳児のスキンケアについて整理し、乳児のスキンケアに関わる現状を明確にすることを目的とし文献検討を行った。

【方法】 「医学中央雑誌」Web版を用い、2018年6月現在、「スキンケア」「沐浴」「皮膚トラブル」「乳児」「子供」「乳児湿疹」をキーワードに組み合わせて検索した。原著論文21件を対象に、研究内容を類似性に基づき分析・分類し、乳児のスキンケアの現状と分娩取扱医療機関におけるスキンケアの指導内容について整理した。

【結果】 対象となった文献の内容は、「乳児の皮膚トラブルの実態」「乳児の皮膚やスキンケアに対する母親の認識の実態」「スキンケアの効果」「母親が行う乳児へのスキンケアの実態」「分娩取扱医療機関における新生児のスキンケア方法」「分娩取扱医療機関におけるスキンケア指導の実態」の6つのカテゴリーに分類された。その内容として、乳児の皮膚トラブルの実態は、季節に関係なく新生児の約7割、乳幼児の約9割程度に皮膚トラブルがあり、多くの母親の困りごとになっていたこと、分娩取扱医療機関におけるスキンケアの指導は充分行われていなかったこと、母親はスキンケア手技に自信がなく、看護職からのスキンケア指導を求めていることが明らかになった。

【結論】 乳児の皮膚トラブルは多いが、スキンケア指導が充分に行われていない。母親へのスキンケア指導を推進する必要がある。

キーワード：文献検討、スキンケア、乳幼児、育児支援

I. 緒 言

日本における育児環境は、核家族化、少子化、メディア情報の氾濫などに伴い大きく変化し、母親の育児不安や育児ストレスは深刻な問題である。母子を取り巻く環境が複雑に変化する中、育児に関する不安や負担軽減のための育児支援が求められている。母親の育児不安の一因として乳児の皮膚トラブルがあげられている¹⁾。乳児の皮膚はバリア機能が弱く、さまざまな刺激も加わりやすいことから、乳児特有の脂漏や湿疹などの皮膚トラブルへつながりやすい。近年の研究では、乳児の皮膚トラブルの出現を減らしたりアレルギー疾患発症を予防するためにはスキンケアが重要であるといわれている²⁾。日本看護科学学会では、ス

キンケアを「皮膚の機能を妨げるものを取り除いたり、皮膚を保護するものを塗ったりすること」と定義している³⁾。

乳児の皮膚トラブルを予防するためには生後早期から洗浄により皮膚を清潔に保ち、保湿することで皮膚のバリア機能を高めるスキンケアが必要である。しかし、実際には生後早期から自宅でスキンケアを実施している母親は少なく、我が子に皮膚トラブルが出現して症状軽減のためにスキンケアをはじめた母親が多いと感じていた。

乳児のスキンケアに関する研究は多くあるが、現状については整理されていない。乳児を対象としたスキンケア指導について検討するために、乳児のスキンケアの現状を明らかにする必要がある。

そこで本研究では、乳児のスキンケアについて先行

研究を整理し、乳児のスキンケアに関わる現状を明確にすることを目的とした。

II. 研究方法

1. 文献検索の方法

「医学中央雑誌」Web版を用い、2018年6月現在、「スキンケア」「沐浴」「皮膚トラブル」「乳児」「子供」「乳児湿疹」で文献検索の結果121件が該当した。キーワードは、小児とくに乳児のスキンケアに関する「子供」「乳児」「スキンケア」、新生児のスキンケアである「沐浴」、皮膚トラブルに関する「皮膚トラブル」「乳児湿疹」を選択した。抽出した文献から会議録、重複文献、総説、疾患に関する文献を除いた、21件を分析対象とした。乳児へのスキンケアの現状と分娩取扱医療機関におけるスキンケアの指導内容について整理した。

2. 分析方法

対象とした文献21件について、研究内容を類似性に基づき分析・分類し、今後の研究課題について展望した。

III. 結果

文献を分析した結果、6つのカテゴリーに分類した。

1. 乳児の皮膚トラブルの実態について

乳児の皮膚トラブルの実態に関する文献は7件⁴⁾⁻¹⁰⁾あり「新生児の皮膚トラブルの実態」「季節の違いによる乳幼児の皮膚トラブルの実態」「新生児の皮脂量や皮膚水分量の実態」「新生児の皮膚トラブルの関連要因」に分類した。

「新生児の皮膚トラブルの実態」について、米澤ら⁴⁾によると、新生児325名の65.5%に何らかの皮膚トラブルがあり、皮膚トラブルの症状はおむつ皮膚炎が33.5%、脂漏性湿疹が32.3%、汗疹が16.9%であったと報告し、土浜ら⁵⁾の新生児101名を対象にした調査では、69.3%に乳児湿疹があり、顔の乳児湿疹の発症率が有意に高いと報告していた。全国の分娩取扱施設342施設対の師長を対象にした樋口ら⁶⁾の調査で、生後1か月間の皮膚トラブルについて質問したところ、出現頻度の多かった皮膚トラブルは、脂漏性湿疹、おむつかぶれ、乾燥であった。廣岡⁷⁾らの調査では、81名中56名に湿疹があり生後16日以降に出現したのが22名だったとし、出現部位は、頬・額・目の周りであり、

洗いにくいと母親が感じている部位であったと報告していた。

「季節の違いによる乳幼児の皮膚トラブルの実態」について、梅原ら⁸⁾と神ら⁹⁾は季節を変えて乳幼児対象に皮膚科専門医による目視診断を行った結果、季節に関わらず1年を通して2歳未満の乳幼児の9割程度に皮膚トラブルが認められ、また汗をかきやすい夏季でも2歳未満の乳幼児の20%以上で乾燥症状があり、月齢が増すごとに乾燥の出現率の増加傾向があると報告していた。

「新生児の皮脂量や皮膚水分量の実態」について、佐藤ら¹⁰⁾によると早期新生児は額部以外の皮脂量は生後24時間ですでに少ない状態であったことを明らかにし、樋口ら⁵⁾は、新生児の97.1%が皮膚水分量不足であり、42.1%が皮膚の油分量不足であったと報告していた。

「新生児の皮膚トラブルの関連要因」について、米澤ら⁴⁾はおむつ皮膚炎のリスク要因として男児、同胞にアトピー性皮膚炎がいる、排便回数が多いことをあげていた。脂漏性湿疹については在胎日数が長くなるほどリスクが高く、特に妊娠41週以降での出生児のリスクが高く、妊娠36週の早産ではリスクが低いと報告していた。また、汗疹については、春・夏生まれで、生後1か月までの1日当たりの体重増加量が多いとリスクが高いことを明らかにしていた。

2. 乳児の皮膚やスキンケアに対する母親の認識の実態について

乳児の皮膚に対する母親の実態に関する文献は11件^{5), 7)-9), 11)-17)}あり「母親の育児に関する心配事の実態」「母親の乳児の皮膚トラブルに対する認識の実態」「乳児の皮膚に関する相談相手やスキンケア知識の入手方法」に分類した。

「母親の育児に関する心配事の実態」について、島田ら¹¹⁾の全国3,852名の母親を対象にした調査で、生後1か月間の子供の心配事の一番は5年前の調査と変わらず皮膚で34.5%であったと報告し、樋口ら¹²⁾は、母親の52.9%が皮膚に悩みを持ち、そのうち67.5%が湿疹の悩みであったと報告していた。また、菊池ら¹³⁾は、退院後母親から子供の皮膚トラブルの相談が91.7%あったと報告し、廣岡ら⁷⁾は、母親の子供の湿疹に対する不安を3つあげ、①湿疹ができることへの不安②アトピー性皮膚炎への不安③沐浴手技への不安をあげていた。また「子供に洗剤洗顔が必要なことはわかっていたが上手に行う自信がない」「子供の目や耳に洗剤やお湯が入ることを心配し洗えない」と

いう母親の意見から、母親は手技に対する不安があると土浜ら⁵⁾は報告していた。

「母親の乳児の皮膚トラブルに対する認識の実態」については、樋口ら¹²⁾は母親の子供の皮膚トラブルの認識と実際の子供の皮膚状態は一致していないと報告し、梅原ら⁸⁾、神ら⁹⁾の調査によると皮膚科専門医による目視診断で2歳未満の乳幼児100名のうち9割程度に皮膚トラブルがあったが、母親が皮膚トラブルを有していると認識しているのは2割程度であったと報告していた。また、母親の85%が一般に子供は皮膚トラブルを起こしやすいと考えているが32%の母親は自身の子供は皮膚トラブルを起こしにくいと考えていると報告していた。逆に奥野ら¹⁴⁾によると母親は看護師にとって問題ない皮膚状態でも皮膚トラブルと認識していたという報告もあった。廣岡ら⁷⁾は、生後1か月以内に子供に湿疹が出現した56人の母親のうち実際に受診したのは8人で、1か月健診で診てもらおうと考えていた母親が26人いたと報告していた。また、澤田ら¹⁵⁾によると子供へのスキンケアの必要性と子供の皮膚トラブルに対する保護者の意識に差があったことを報告しており、樋口ら¹²⁾の調査から子供の皮膚のトラブルの有無と母親の子供へのスキンケアの実施とは関係なく、母親自身が自分の皮膚状態を良好でないとして認識している母親は我が子にスキンケアを実施することが多いと報告していた。

「乳児の皮膚に関する相談相手やスキンケア知識の入手方法」については、杉山ら¹⁶⁾の調査によると、相談相手は、祖母38.2%、夫21.8%、看護師18.2%、相談しない38.2%であり、スキンケア知識は、69.1%がメディア、40.0%が親類家族、38.2%が看護師から得ていた。一方で、土浜ら⁵⁾は、相談相手は医療関係者が一番多く、次いで親・友人であったとし、樋口ら¹²⁾も、相談相手は助産師が73.3%、家族が66.7%であったと報告していた。また、沐浴指導にスキンケアを導入して1年後の杉山ら¹⁷⁾の調査ではスキンケア知識は、メディアが減少し、看護師が有意に増加したことを報告していた。

3. スキンケアの効果について

スキンケアの効果に関する文献は11件^{5), 10), 14), 15), 17) - 23)}あり、「ガーゼの有無による効果」「洗浄剤による効果」「泡立てによる効果」「スキンケア継続による効果」「その他」に分類した。

「ガーゼの有無による効果」について、佐藤ら¹⁰⁾は、3歳未満の乳幼児はガーゼを使用せず洗浄剤洗顔も取り入れたスキンケアをしたほうが皮膚の変化が少

なかったと報告し、杉山ら¹⁷⁾は、沐浴指導をスキンケア指導に変更しガーゼを使用せずに手で洗浄剤を用いて洗うと1か月健診時の看護師の皮膚状態の評価できれいが有意に増加したと報告していた。正木ら¹⁸⁾も、ガーゼを用いずスキンケアを行うと体幹、四肢の皮膚トラブルが著しく減少し、医師看護師の主観的評価で脂漏性湿疹と乾燥が減少したと報告していた。

「洗浄剤による効果」について、古田ら¹⁹⁾は、洗浄剤を使用したほうが、表皮水分量が高いと報告していた。また乳児湿疹発症後、洗浄剤洗顔を開始し、すべての湿疹が軽減したと土浜ら⁵⁾は報告していた。

「泡立てによる効果」について、梶谷ら²⁰⁾は、液体石鹸を泡立てると除去方法（拭取りと洗浄）に違いがあっても皮膚表面の違いはなかったと報告しており、深田ら²¹⁾は泡立てた場合は4回の拭取りで拭取り前の皮膚表面のpHに戻るが泡立てなかった場合は戻らなかったと報告していた。また、小林ら²²⁾は、洗浄剤を泡立てることで皮膚のきめが細かくなめらかになり、水分保持能が亢進するが泡立てないと乾燥しやすくなると報告していた。

「スキンケア継続の効果」について、澤田ら¹⁵⁾は、スキンケアを11か月以上継続している乳幼児は角質水分量が高く、経皮水分蒸発量が低く、皮膚科専門医による皮膚所見で乾燥が少なかったと報告していた。奥野ら¹⁴⁾は、出生直後から1か月健診までスキンケアを継続すると水分量の上昇率が高い傾向にあったと報告し、生後からスキンケアをしなかった新生児ほうが1か月健診時の看護師評価で乾燥が多かったと報告していた。また佐藤ら¹⁰⁾もスキンケアを1～3歳児まで継続すると角層水分量が有意に多くなったと報告していた。

「その他」として、古田ら²³⁾は、乳児の皮膚トラブルは沐浴法（発症時の皮膚洗浄法）を変更すると7日以内に8割の皮膚トラブルが消失し、残りの2割も軽減したと報告していた。また、古田ら¹⁹⁾は、独自の洗浄法である簡易型S洗浄法を用いると額の水分量は開始7日目で増加し、皮膚トラブルがある乳児に行くと9割以上、軽減したと報告していた。

4. 母親が行う乳児へのスキンケアの実態について

母親が行う乳児へのスキンケアの実態についての文献は7件^{5), 7) - 9), 12), 16), 17)}あった。

杉山ら¹⁶⁾は地方大学附属病院小児科で1か月健診を受診した保護者55名を対象にした調査で、母親のスキンケア方法は頭髮洗浄時のシャンプー使用率が21.8%、洗浄剤洗顔50.9%、ガーゼ使用率81.8%、シャワー使

用率9.1%であり、母親は自分のスキンケア手技に自信を持っていないと報告していた。一方で、樋口ら¹²⁾は地方の子育て支援イベントに参加した生後1か月の新生児の母親70名を対象にした調査で沐浴の頻度は80%が1日1回で、洗浄剤は98.6%使用し、洗浄剤洗顔を81.4%していると報告していた。また、廣岡⁷⁾らは子供への洗浄剤洗顔に対する母親の意見を以下の4つあげ、①石鹸の使用方法や石鹸成分と安全性と保湿について聞きたい②湿疹が治りにくい場合も石鹸を使用してよいか知りたい③湿疹の有無にかかわらず洗浄剤洗顔を指導してほしい④どのような湿疹ならば受診が必要なのか聞きたいに分類していた。

杉山ら¹⁷⁾は、頭部はシャンプー、全身はよく泡立って洗浄剤でガーゼを使用せず手で洗い、シャワーでよくすすぎ、保湿剤を塗布するスキンケアを導入すると、洗浄時のガーゼ使用率が減少し、洗浄剤洗顔率および頭髪洗浄時のシャンプー使用率はともに増加、すすぎ時のシャワー使用率も増加し、母親のスキンケアに対する自信が有意に高くなったと報告していた。また、土浜ら⁵⁾によると、経産婦は上の子供で乳児湿疹が出現したとき洗浄剤洗顔で湿疹が軽減した経験から下の子は始めから洗浄剤洗顔をしている母親が多かったと報告していた。

しかし、保湿ケアを行っているのは、生後1か月の新生児の母親70名のうち48.6%でそのうち毎日保湿ケアを行っている母親は40%であり、実施理由は皮膚トラブルの予防が最も多かった¹²⁾。梅原ら⁸⁾ 神ら⁹⁾による季節の違いによる保湿ケアの実施調査では、毎日保湿ケアを行っているのは春季(3.4月)が42%、夏季(8.9月)は22%であったと報告していた。

5. 分娩取扱医療機関における新生児のスキンケア方法について

分娩取扱医療機関における新生児のスキンケア方法についての文献は4件^{6), 13), 22), 24)}あった。

細坂ら²⁴⁾は、全国の産科施設256施設を対象にした調査で出生直後はドライテクニック(出生後は血液などの汚れを取るだけにし、なるべく児に手をかけず自然な状態を保つ保清方法のこと。日本では1997年にWHOから出された沐浴に関する推奨を受けて普及している手法^{18), 22), 24)})で生後1日目以降は沐浴が最も多い清潔ケア方法であったと報告していた。小林ら²²⁾も、分娩取扱施設40施設において、出生直後は清拭を行い生後1日目以降連日沐浴が72.5%で一番多い保清方法と報告していた。また樋口ら⁶⁾も、全国の分娩取扱施設342施設を対象にした調査で地域や年間分娩

件数によって初沐浴までの期間などはさまざまに85パターン以上の保清方法があった。出生直後は何もしないあるいはドライテクニックが半数以上を占め、生後1日目以降に沐浴の保清方法を実施する施設が多いと報告していた。さらに、看護師は沐浴時身体には洗浄剤を99.4%が使用しているが顔には74%が使用しておらず、保湿ケアは、89.8%していないと報告していた。菊池ら¹³⁾の全国の沐浴指導に関わる看護職241名の調査でも、看護職が沐浴時洗浄剤洗顔をしているのは31.1%で、保湿ケアを行っているのは11.6%であったと報告していた。

6. 分娩取扱医療機関におけるスキンケア指導の実態について

分娩取扱医療機関におけるスキンケア指導の実態についての文献は5件^{6), 13), 22) - 24)}あった。「分娩取扱医療機関でのスキンケアの説明」「分娩取扱医療機関での母親による沐浴の実施状況」に分類した。

「分娩取扱医療機関でのスキンケアの説明」について、樋口ら⁶⁾の全国調査では、保湿ケアの説明は72.8%でしておらず、菊池ら¹³⁾の全国調査でも、洗浄剤洗顔を指導しているのは74.3%だが保湿ケア指導をしているのは24.1%であったと報告していた。洗浄剤洗顔の指導をしない理由をおもに4つあげ、①洗浄剤のすすぎ不足による皮膚トラブルも考えられるため②母の手技的に厳しいので皮膚トラブルがない新生児には必要がない③湿疹は1か月ぐらいで出てくるのできれいなうちは必要ない④知識・エビデンスとして知らないであった。また、保湿ケア指導をしない理由をおもに2つあげ、①保湿の重要性を知らない②どんな保湿剤を使用したら皮膚トラブルが回避できるのかエビデンスを知らないことをあげていた。また、乳児の皮膚トラブル発症に影響を及ぼした沐浴教育要因として、古田ら²³⁾は、洗浄剤などに対する説明不足や洗顔後のすすぎと頭部洗浄の実践教育やベビーバス長期使用の弊害やベビー用化粧品に関する情報提供不足をあげていた。

「分娩取扱医療機関での母親による沐浴の実施状況」について、小林ら²²⁾は、新潟県内40施設で入院期間中に母親による沐浴を実施しているのが41%、希望者に実施が41%、未実施18%であり、年間分娩数200件未満の施設では母親全員もしくは希望者全員が沐浴を実施し、年間分娩件数が601件以上の施設では母親は実施していないと報告していた。細坂ら²⁴⁾の全国産科256施設における調査では、入院期間中に母親が一度も沐浴を実施しない施設が54.3%あったと報告して

いた。

IV. 考 察

1. 乳児の皮膚トラブルおよびスキンケアの現状

乳児の皮膚トラブルの実態は、新生児の約7割^{4), 5)}、乳幼児の約9割に皮膚トラブルがあり^{8), 9)}、季節に関わらず乳幼児期の皮膚トラブルがあり、多くの乳幼児にとって問題になっていることが明らかになっていた。

早期新生児は皮膚の水分量と油分量が少ないこと、新生児は生後16日以降に湿疹がやすいこと、汗をかきやすい夏季の時期においても乳幼児は乾燥症状が約2割以上で見られ、月齢が増すごとに乾燥症状が増加する^{7)-10), 12)}。これらのことから生後早期から1年を通して継続した保湿ケアが必要である。

これまでの研究結果から乳児のいくつかの皮膚トラブルの関連要因がすでに明らかになっていた。おむつ皮膚炎のリスク因子は男児、同胞にアトピー性皮膚炎がいること、排便回数が多いことであり、脂漏性湿疹のリスク因子は在胎日数が長いこと、出生直後の胎脂の付着が少ないこと、汗疹のリスク因子は、春・夏生まれ、生後1か月までの1日当たりの体重増加量が多いことが明らかになっていた⁴⁾。このことから、皮膚トラブルを起こしやすい乳児には、皮膚トラブルに関して育児不安や負担が軽減できるような個別性に基づいた支援が可能になると思われる。特に41週以降で出生し春・夏生まれの男児は皮膚トラブルの発症のリスクが高いため、予防のためのスキンケア指導、皮膚トラブル発症時の対応など具体的な育児支援が必要である。

乳児の皮膚やスキンケアに対する母親の認識の実態は、5年前から母親の育児に関する一番の心配事が皮膚であり¹¹⁾、我が子の皮膚に対する悩みや相談が多かった^{12), 13)}。母親は子供の皮膚に関心が高いため、母親に乳児の皮膚の知識や今後起こりうる皮膚トラブルや対処方法、受診のタイミングなどの情報を提供することで適切なケアを行うことができると思われる。そして、母親は我が子に適切なケアを行うことで育児に対しての自信につながると考える。また、子供に皮膚トラブルがあるにもかかわらず、母親は皮膚トラブルがあると認識していなかったり、逆に心配するあまり皮膚トラブルがないのに皮膚トラブルがあると認識していたり、実際の子供の皮膚状態と母親の認識は一致していなかった^{8), 9), 12), 14)}。多くの母親は子供の皮膚について心配だが、必ずしも子供の皮膚状態と母親の認識が一致していない。このことから、子供の皮膚状態

と母親の認識が一致しない要因を明らかにし、看護職は母親が子供の皮膚の状態を正しく捉えて評価することができるようなスキンケア指導を行う必要がある。

より効果的なスキンケアの方法は、顔も含めた全身をガーゼは使用せずに洗浄剤を泡立て使用し、保湿ケアを継続する方法であることが明らかになっていた^{5), 10), 14), 15), 17)-22)}。しかし、母親が行う乳児へのスキンケアの実態は、顔も含めた全身を洗浄剤で洗っていたが保湿ケアを行っている母親は少なかった^{8), 9), 12), 16)}。具体的にどのようなスキンケア方法が自宅で行われているのかは明らかではないが、ガーゼを使用している割合が多く¹⁶⁾、母親は昔ながらの沐浴を継続しているという研究結果もあった。母親が洗いにくいと感じている部位と皮膚トラブルの出現部位が同じ⁷⁾ことから、母親の洗浄手技で、汚れが落としきれず皮膚トラブルを招いている可能性がある。母親が洗浄剤の泡立て方、洗浄剤洗顔や充分なすすぎの手技、保湿剤の知識などエビデンスを取り入れた具体的なスキンケアを習得するには時間を要することが推測される。

今回の文献の中にはスキンケアを積極的に取り入れている分娩取扱医療施設でスキンケア指導を受けている母親が多い地域での調査研究も含まれており乳児へのスキンケアの実態は施設差がある可能性がある。

2. 分娩取扱医療機関における新生児へのスキンケアの実態と母親への指導内容

分娩取扱医療機関での看護職のスキンケア方法の実態は、洗浄剤洗顔が3割、保湿ケアが1割程度しか行われていなく^{6), 13)}、エビデンスに基づいたスキンケアが普及されていない。分娩取扱医療機関の看護職に対してエビデンスに基づいたスキンケアの理解と手技習得の方法について検討する必要がある。また、分娩取扱医療機関での母親への沐浴指導の現状は沐浴指導をしない施設が半数程度ある^{22), 24)}ことから、多くの母親は自宅ではじめて我が子の沐浴を行っていると推測される。

母親はスキンケア手技に自信がなく¹⁶⁾、医療者からのスキンケア指導を求めている⁷⁾。産院や産科でスキンケア指導を受けると母親は我が子にスキンケアを実施し、皮膚の知識の入手方法やトラブルの相談相手が看護職となりやすい¹⁷⁾ことがわかっている。また、乳児の皮膚トラブルの発症に影響を及ぼした沐浴教育要因として、スキンケアについて説明不足、実践教育不足、乳児特有の皮膚トラブルの情報提供不足²³⁾が明らかになっていた。このことから分娩取扱医療機関の看護職からのスキンケア指導は母親のニーズがあり、乳

幼児の皮膚トラブル予防のためにとっても重要であると思われる。

子供の成長に伴い診療科が産科から小児科へ移行することや新生児訪問や乳児健診で地域の助産師、保健師も関わることから、乳幼児にかかわる看護職による一貫したスキンケアの継続した支援が望まれる。そのためには、乳幼児にかかわる看護職はスキンケア教育を受ける必要がある。

看護職者が育児支援のひとつとしてエビデンスに基づいたスキンケア支援を継続して行うことで母親はスキンケアのスキルを習得することができる。そして、我が子の皮膚トラブルに対応することができることで育児への自信と楽しさにつながることを期待したい。

V. 結 論

乳児のスキンケアに関わる現状を明確にすることを目的に文献検討を行った結果、以下の結論を得た。

1. 乳児の皮膚トラブルの実態は、新生児の約7割、乳幼児の約9割程度に季節を問わず皮膚トラブルがあり、多くの乳幼児にとって問題になっている。
2. 母親の心配事として皮膚に関することが多いが、子供の皮膚状態と母親の評価は一致していない。
3. 分娩取扱医療機関におけるスキンケアの指導は充分行われていない。
4. 母親はスキンケア手技に自信がなく、看護職からのスキンケア指導を求めている。産院や産科でスキンケア指導を受けると母親は我が子にスキンケアを実施し、皮膚の知識の入手方法やトラブルの相談相手が看護職となりやすい。

引用文献

1. 鳥田三恵子, 杉本充弘, 懸俊彦, 新田紀枝, 関和男, 大橋一友, 他: 産後1か月間の母子の心配事と子育て支援のニーズおよび育児環境に関する全国調査. 小児保健研究 2006; 65(6): 52-762
2. 宮地良樹, 安部正敏: エビデンスに基づくスキンケア Q&A あたらしい皮膚科治療へのアプローチ. 中山書店, 2019.6.20: 87
3. 看護行為用語の定義一覧, 日本看護科学学会編: アクセス2019年12月12日 https://www.jans.or.jp/modules/committee/index.php?content_id=33
4. 米澤かおり, 春名めぐみ, 松崎政代: 新生児期の皮膚トラブル実態とその関連要因. 日本助産師学会誌 2017; 31(2): 111-119
5. 土浜敏子, 白田美奈子, 田中有子, 本多小百合: 新生児の自宅における沐浴の実態調査 乳児湿疹予防のための石けん洗顔の現状. 川崎市立川崎病院院内看護研究集録65回, 2011: 5-7
6. 樋口幸, 野津昭文, 梅野貴恵, 安部真紀: 日本における早期新生児期の保清・スキンケアの現状と課題. 母性衛生 2017; 58(1): 91-99
7. 廣岡麻里, 土田美穂: 石鹸を使用しての顔の沐浴の有効性. 日本看護学会論文集: 小児看護2002; 32: 139-141
8. 梅原香織, 岡本直子, 相良早苗, 豊島晴子, 堀田光行, 水嶋広樹, 他: 母親が皮膚科受診の必要がないと診断していた乳幼児の皮膚実態分析 (夏季). 日本小児皮膚科学会雑誌 2017; 36(1): 23-29
9. 神久美, 岡本直子, 梅原香織, 相良早苗, 豊島晴子, 堀田光, 他: 母親が皮膚科受診の必要がないと診断していた乳幼児の皮膚実態分析 (春季). 日本小児皮膚科学会雑誌 2017; 36(1): 15-22
10. 佐藤嘉純, 渡邊美和, 田中聖子, 小松令以子, 上村恵子, 宮川明子, 他: 乳幼児の皮膚とスキンケア. 日本小児皮膚科学会雑誌 2008; 27(2): 189-194
11. 鳥田三恵子, 杉本充弘, 懸俊彦, 新田紀枝, 関和男, 大橋一友, 村上睦子, 他: 産後1か月間の母子の心配事と子育て支援のニーズおよび育児環境に関する全国調査. 小児保健研究 2006; 65(6): 752-762
12. 樋口幸: 産後1か月間の皮膚状態と母親の認識との比較. 母性衛生 2017; 57(4): 573-580
13. 菊池泰子, 永塚ちえみ: 新生児沐浴指導でのスキンケア指導導入の実際. 母性衛生 2017; 58(1): 166-175
14. 奥野由佳子, 小野寺菜, 木田由衣, 榎和美, 塚原裕美子, 清水淳子: 退院後産後1ヵ月までの保湿の有無が新生児の皮膚に与える影響. 日本看護学会論文集ヘルスプロモーション 2018; 48: 35-38
15. 澤田真吾, 佐藤嘉純, 小松令以子, 田中聖子, 佐々木りか子: 保育園で保湿ケアを実施している乳幼児群と保湿ケアを実施していない乳幼児群の皮膚状態の比較調査. 日本小児皮膚科学会雑誌 2017; 36(1): 7-14
16. 杉山剛, 窪川理恵, 寺島由美子, 矢島千夏, 東田耕輔, 杉田完爾: 1か月健診を受診した新生児の母親による新生児スキンケアの現状. 日本小児皮膚科学会 2014; 33(1): 7-12
17. 杉山剛, 窪川理恵, 竹田礼子, 平田修司, 杉田完爾: スキンケアを重視した新しい沐浴法が新生児の皮膚状態に与える影響. 日本小児皮膚科学会雑誌 2016; 35(3): 145-152
18. 正木宏, 野渡正彦, 田中雄大: 産後早期からの洗浄と保湿に注目した, 新生児, 乳児の新たな皮膚ケアに関する考察. 日本新生児成育医学会雑誌 2017; 29(2): 347-355
19. 古田祐子, 安河内静子: 簡易型S皮膚洗浄法が肌トラ

乳児のスキンケアに関する文献検討

- ブルを有する乳児と実施者である養育者に及ぼす影響.
福岡県立大学看護学研究紀要 2016;13:11-20
20. 梶谷麻由子, 松本亥智江: 液体石鹸を用いた泡の洗浄と拭き取りによる皮膚表面の違い 皮膚表面のPH・経皮水分蒸発量・角層水分量・各層膜厚を指標として. 日本医学看護学教育学会誌 2015;24(1):49-55
21. 深田美香, 宮脇美保子, 高橋弥生, 松田明子, 南前恵子, 内田宏美: 石鹸清拭の効果的な方法に関する検討 石鹸の泡立てによる石鹸成分の除去効果について. 日本看護研究学会雑誌 2003;26(5):169-178
22. 小林美代子, 池田かよ子, 河内浩美, 小林正子: 早期新生児期における保清方法の実態調査. 新潟青陵大学紀要 2008;8:99-116
23. 古田祐子: 乳児の肌トラブル発症に影響を及ぼす沐浴教育要因. 福岡県立大学看護学研究紀要 2015;12:1-11
24. 細坂泰子, 茅島江子, 抜田博子: 新生児清潔ケアの実態とケア選択の探索 混合研究法を用いて. 日本助産学会誌 2015;29(2):240-250

Literature Review on Infant Skin Care

Takahashi Ikuko*, Sato Yukiko**, Konta Shiho**, Honma Megumi*

*Yamagata University Faculty of Medicine Graduate School of Nursing

**Yamagata University School of Nursing

ABSTRACT

Background: Skin problems of infants are one of the factors that cause parental anxiety in mothers. Literature review was conducted to organize facts about and reveal the state of affairs concerning infant skin care.

Method: On Japan Medical Abstracts Society Web, search was conducted based on the information as of June 2018, by combining the following keywords: "skin care", "baby bathing", "skin problems", "infants", "children", and "infant eczema". Details of the studies conducted in 22 original articles were analyzed and classified based on the similarity, and information on the state of affairs concerning infant skin care as well as on skin care instructions provided at medical institutions with birth facilities was organized.

Results: Topics featured in the literature subject to the analysis were classified into the following six categories: "Reality of infant skin problems," "Reality of mothers' perception about infants' skin and skin care," "Effects of skin care," "Reality of skin care for infants done by mothers," "Infant skin care methods at medical institutions with birth facilities," and "Reality of skin care instructions provided at medical institutions with birth facilities." Details of the studies indicated that in reality, approximately 70% of newborn babies and approximately 90% of infants and young children had skin problems regardless of season, which was causing worries to many mothers; that sufficient skin care instructions were not provided at medical institutions with birth facilities; and that mothers were not confident in skin care techniques and were looking for skin care instructions from nursing staff.

Conclusion: While many infants suffer from skin problems, sufficient skin care instructions are not provided. It is necessary to promote provision of skin care instructions to mothers.

Keywords: literature review, skin care, infants and young children, parenting support